

都庁界隈の今昔

ここに古い地図があります。昭和九年の新宿駅西口界隈の都市計画図です。平成三年に丸の内から移転した東京都庁舎と東京都議会棟は、この地図の主要部分を占める淀橋浄水場の跡地に建てられました。今回の職場界限探訪は、この古い地図を縦糸に、また種々の参考資料からの引用文を横糸にして、新宿副都心エリアの昔の姿を再現してみたいと思います。

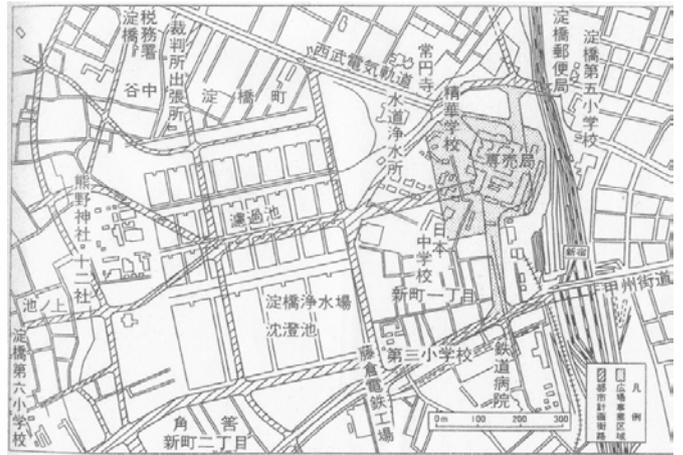
昭和九年の地図を読む

淀橋浄水場

この地図の真ん中から左寄りの半分を占めているのが淀橋浄水場です。沈澄池が四池、濾過池が二十四池、詳しく図示されていません。濾過池の右上の「水道浄水所」と記された処に浄水場を所管する事務所がありました。「西武電気軌道」と記されている通りは、青梅街道です。この道沿いに大きな建物が描かれていますが、これが本館です。現在、安田火災ビルが建っている辺りです。この右手の角地に正門があったと思われる浄水場は昭和四十年三月末で閉鎖されました。



▲ 淀橋浄水場址の碑（新宿エルタワービル前の小公園）



▲ 昭和九年の新宿駅西口界隈の都市計画図

学校

道路を挟んだ向かいにある「精華学校」は、精華高等女学校のことで戦後ここに存続し、日活の看板女優となった吉永小百合が在籍していたことのある学校です。ここには今、新宿エルタワービルが建っています。

その下に「日本中学」とみえますが、東宮御学問所御用掛を務めたこともある杉浦重剛が創設した学校で、大正五年にここに移転してきました。新宿郵便局から明治安田生命ビルにかけての一角が、その校地に当たります。

その左手の四角い建物は、当時の工手学校、現在の工学院大学です。一時日本中学に間借りしていましたが、昭和三年に新校舎（当時は夜間制）が落成しました。これも現在はエステック情報ビルとなり、大学はこのビルの中に入っています。

地図の真ん中下に「第三小学校」とあるのは「淀橋第三小学校」のことで、昭和六十一年三月に統合され廃校になるまで、ここに存続していました。

余談ですが、クリスチャンである新渡戸稲造が初代学長を務めた東京女子大学は、この地で開学しています。現在の新宿センタービルから朝日生命ビルにかけて、かつて「衛生院」と呼ばれた、あるキリスト教宣教師団の静養所がありました。ここに仮校舎を置いて大正七年に開校したのです。大正十三年に杉並の善福寺に移転するまでの六年ほどの短い間ですが、当時、在学した歌人・梅沢時子は、

『文字通り場末町で、路傍には三味線弾きだの、一膳飯屋の屋台店などが立ち並んでいるのみで、今日の大廈（たいか）高樓などは一軒もなく、実にうらぶれた汚い町であった』
と回想しています。

この頃の新宿駅西口一帯は、武蔵野の面影を残すケヤキや松が茂る静かな郊外だったのです。元々、江戸時代にはいくつかの大名の下屋敷や徳川將軍家の鷹狩り場があった処です。明治維新後、元勳・岩倉具視の所有となった「華竜園」と呼ばれる庭園がありましたが、新宿駅の拡張工事で取り払われてしまいました。

煙草工場

新宿駅西口の前にデンとして構えている「専売局」は、正式名称「東京地方専売局・淀橋工場」という官営（大蔵省）の煙草工場で、現在の小田急ハルクや西口会館を含む一面を占めていました。工場が完成したのは明治四十三年のことです。煙草工場ができた当時のことを田辺茂一（紀伊国屋書店社長）は、

『夕暮れどきの退社時には、束髪や桃割れに白いエプロン姿に弁当箱をかかえた女工さんたちが、三々五々どつと門を出て駅に向って賑やかだった。新宿駅ラッシュのはしりといえます』（「新宿駅八十年のあゆみ」（新宿駅編、昭和三十九年）

と振り返り、さらに淀橋浄水場について

『専売局のつづぎに精華女学校、それから横丁（横丁に面した土手は美しい桜並木だった）をへだてて淀橋浄水場の広大な敷地があった。浄水場の土手には土筆があり、貯水池には魚がいて子供はこの辺でよく遊んだ。それからつづく柏木成子坂方面は、表通りこそ店並はあったが裏側は茶畑や畑、田圃だった』

と綴っています。この工場は「駅前広場事業」の実施により、昭和十一年に墨田区に移転しました。

十二社

淀橋浄水場の左に「熊野神社十二社」とあります。十二社（じゅうにそう）は、江戸時代より景勝地として知られ、清水の湧く御手洗（みたらし）池や高さ三丈の大滝がある庶民の行楽地でした。明治二十六年から始まった淀橋浄水場の建設工事で、大滝の辺りは埋め立てられてしまい、一時寂れていました。第一次大戦後復活し、行楽地というよりは花柳街として賑わっていましたが、戦前から戦後にかけては

『私が古谷と写生した池の絵も、戦災で焼かれなければ、当時の面影を伝えたはずである。その頃も池の周りは御茶屋が建ち並び、池畔には涼み台が突き出て、屋形船が何艘か浮かんでいたが、敗戦後は池だけが小さく残って

いた。が、それもいつのまに埋め立てられたのか、消えてしまった』（「新宿つ子夜話」野村敏雄、青蛙房）

といった大きな情景変化がありました。

工場

熊野神社の横にいくつかの建物群が見えます。これは当時「六桜社」と称していた現在の小西六写真工業の工場と研究所です。明治三十五年の創業以来、国産化に成功した写真用フィルム、カメラなどの写真用機材を昭和三十八年までここで製造していました。

地図の左下の

「淀橋第六小学校」の両脇にも工場があり、また、「新町二丁目」と記された処には東京ガスのガスタンクがあり、ちよつとした工場地帯の一面も持っていました。



▲写真工業発祥の地（新宿中央公園）

火除けの原

新宿駅の南にある「鉄道病院」の辺りは、「火除けの原」と呼ばれていた、起伏に富んだ広大な原っぱでした。この原の東側を南北に走っていた鉄路が日本鉄道の品川線（現在の山手線、明治十八年開通）で、少し遅れて明治二十八年に甲武鉄道（今の中央線）が通りました。さらに昭和二年になって小田急線が開通し、千駄ヶ谷新田駅（今の南新宿駅）が、その先に山谷駅（今の参宮橋駅）ができました。一段低かった田んぼの上に小田急本社が建てられ、すぐ近くに鉄道省の鉄道病院が生まれました。この火除けの原は、

『原っぱには、ところどころに田んぼがあり、畑があり、草地があり、肥

だめがあつて、子供ばかりか、大人もよく間違えてこの肥だめにはまり、人騒がせになつた。火除けの原は関東大震災の後まであつたが、もっぱら子供たちの遊び場だつた。平坦な草地はベースを置いて、小中学生が野球の練習や試合に使つた。子供たちの野球熱は、すでにこのころから盛んで、アメリカの大リーグが初来日したのは大正二年だが、新宿周辺の小学校は、それより以前から、みんな野球チームを持つていた』（「新宿つ子夜話」野村敏雄、青蛙房）

との記述にあるように、その一面には地元の人たちが自由に使える広場があつたのです。

京王線

この地図には名称が記されていませんが、甲州街道に沿つた玉川上水縁を京王線が走っていました。新宿―笹塚間が開通したのは大正四年で、翌年には府中まで延長されています。当初、京王線の起点は現在の新宿三丁目交差点の処にあり、駅名も「新宿追分」でした。甲州街道と青梅街道が分かれる処です。この駅が今の西口に移つたのは、終戦の直前の昭和二十年になつてからです。

淀橋浄水場と玉川上水の名残りを訪ねて

この写真は、昭和三十六年の淀橋浄水場界隈の航空写真です。真ん中に写っているのが淀橋浄水場です。

明治二十六年に工事が始まつた近代水道は、五年後の三十一年の暮、その最初の水を日本橋地区に給水しました。玉川上水の水は池に溜められ、きれいに濾過され、蒸気ポンプで圧力をかけ鉄の水道管で市内に送られました。大正末までは、石炭を燃やす蒸気ポンプだったので。大きな機関室の上にそびえる二本のレンガ造りの煙突から黒い煙がモクモクと出ていたそうです。沈澄池や濾過池の壁は、レンガで固められていました。掘り揚げた土はトラックで運ばれ谷を埋めて、ほぼ真つ直ぐな土手を築いていきました。甲州街道の北側の代田橋から淀橋浄水場までの間は、この土手の中にコンクリート

で固めた水路を新たに造り、玉川上水の水を取り込みました。新水路は、今の角筈図書館の前を流れて浄水場に入つていきました。

既存の川や道路は、この土手の下をトンネルで潜っていました。今でもその様子を渋谷区本町で見ることができません。

浄水場の名残りが、新宿中央公園にあります。沈澄池の建設残土で造つたといわれる小高い築山の上にある六角堂です。ここは、浄水場を見学に来た人が説明を受けたり、休憩をしたところだそうです。浄水場の池壁に使われた明治三十年頃に焼かれた古いレンガが、記念として遊歩道に敷き詰められています。

また、浄水場で活躍した「制水弁」が、住友ビルの前広場に置かれています。この広場は、かつての濾過池の壁をイメージして三方がレンガ壁で囲まれています。そ



▲ 昭和三十六年の淀橋浄水場界隈



▲ 築山の六角堂（新宿中央公園）



▲ かつての池底から都庁舎をのぞむ
(住友ビル前の広場)

の一角に「東京水道発祥の地」の銘板がはめ込まれています。

大正十二年の関東大震災によって、新水路に無数の亀裂が入り、二箇所が決壊してしまいました。幸い、旧水路の方は路肩が崩れる程度で送水には支障がなかったため、旧水路経由で上水の水を流し、あらかじめ緊急用として設置してあったポンプを用いて、浄水場に汲み上げ、急場をしのいだといえます。新水路が復旧するまでの十日間は、旧



▲ 淀橋浄水場で使われた制水弁 (住友ビル前の広場)

水路が救援したのです。

新水路の抜本的な改造が検討され、甲州街道の拡張工事に合わせて、昭和六年から八年にかけて新たに鋼管製の水道管が埋設されました。通称、新々水路と呼ばれるものです。新水路は廃止され、水路敷に沿って道路が建設されたり、水路敷そのものも公園になったり、公営住宅が建てられたりしました。

昭和三十六年の写真の右上に、昔のままの姿を残した玉川上水の旧水路がわずかに写っています。しかし、そこも現在は埋立てられ道路となり、その下には地下化された京王線が通っています。



▲ 新水路のあった土手を渡る道路 (渋谷区本町)

参考資料 (文中で明記したものを除く)

- 「玉川上水」 肥留間博、たましん地域文化財団
- 「地図から消えた東京遺産」 田中聡、祥伝社黄金文庫
- 「江戸東京物語 山の手篇」 新潮社
- 「東京都市計画物語」 越沢明 日本経済評論社

探訪余話

『こんなに深い意味だった 童謡の謎3』(合田道人、祥伝社、平成十四年)の中に、「春の小川はどこにある？」の項があります。なんと、誰でもが一

度は口ずさんだことのある、あの「春の小川」の詩は、新宿の火除けの原とは地続きの代々木の辺りを流れていた小川（現在は暗渠化され下水道管となっている）がモデルであったというのです。そのさわりの部分を紹介して探訪余話とします。

『春の小川は ささらさら流る…。この歌が文部省唱歌として「尋常小学唱歌」の四年生の教材に載ったのは、大正元年（一九一二年）のことだった。すみれやれんげの花が咲き、えびやめだか、小ぶなが泳いでいるこの歌詞は、すぐさまどこか田舎の風景を思い起こさせてくれる。まさかこの小川が大都会、東京の川の歌だとは考えないであろう。…（作詩者の）高野（辰之）はその頃、ちょうど代々木に居を構えていた。…ここから現在のNHKまでの裏の通りにかけては、高野のお気に入り散歩コースだったといわれている。その途中に宇田川の支流、河骨（こうほね）川が流れており、ここが「春の小川」のモデルになった場所だったのである。…代々木の練兵場から、やわらかな芝におおわれた傾斜が続き、「春の小川」の河骨川のせせらぎが、そこには聞こえていたのである。その岸辺があったところにこの歌の碑が建っているのである。現在の代々木五丁目、小田急線沿いだ』